

教 仁 名 聞

第81号
(発行日)
2017年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

いのちと慈悲心

テレビ番組でときどき動物の生熊が放映されています。

先日、猿たちの群れの行動が取り上げられていました。猿の行動は人間に似たところが多く、私たちに身近に感じられて面白いものです。猿にも短気がよくケンカをする種もあれば、オランウータンのようにのんびりと平和な種もあります。ただ、ケンカ早い猿でも人間のように殺し合うことは殆どないようです。それは自然に本能的な制御(せいぎよ)がきいているからでしょうか。

先日、そんな群れの生熊で、そうなんだなと感じたことがあります。それは、母猿が自分の生んだ子猿に愛情を注ぐ光景です。子猿にチョットでも危険があると感じるとどこまでも子供を守ろうとします。母猿は子猿に少しでも危害をかけようとする相手を威嚇し、子猿を抱いて安全な場所へ移っていくという姿です。こういう内容の番組はよくありますので珍しくもないのですが、ふと感じたことがあります。

ます。それは、人間や猿に限らず、生き物(有情)の多くは自分の生んだ子には、自ずと親子のいのちの共感性があり、子供を自分のいのちと同じように感じて、それを愛し、守ろうとするのだなあ、と思うのです。

たとえホ乳類でなく魚類でも、たとえば産卵するときは、自分の産んだ卵が危険にさらされず、成長しやすい場所を探して産むようです。これは子孫を残そうとする本能といえますが、愛の本能ともいえるのではないのでしょうか。

いのちは単に物質的ではなく、意識的であります。いのちは単に物質的化合物というだけにおさまらない意識性というか精神性というかあるいは統合性というか、そういうものを反面ともなっているのでしょうか思えません。

「親は自分の産んだ子を愛さずにはおられない」ということは当たり前と言えば当たり前ですが、不思議と言え

本当に不思議です。私はそこにいのちのもっている不思議を思うのです。理屈も論理もないのです。おのずから具わっているのです。不思議です。自分の子を愛し、守ろうとする心は生きているものの、いのちそのものにあるのだと感じます。

ただ問題は自分の産んだ子は愛するが、自分以外の他者に対しては、そうはいかず時には怒ったり、殺し合ったりします。

なぜでしょうか。それは「迷っている」いのちだからだと思います。迷いゆえに、自他を分け、自らを愛し他を憎むという愛憎の煩惱が強くしごとく起こるからだと思います。衆生(有情)は仏でない限り迷いの心、自他を分ける迷いの意識がありますから、どうしても悲しいかな愛憎してしまうのだと思います。

阿弥陀仏とは寿命無量(はかりなきいのち)と光明無量(はかりなき光)といわれています。阿弥陀仏のいのちは無量であります。無量の光明であって、この場合の光とは

この上なき覚りの智慧を意味します。

阿弥陀仏には、自他を分別して、自分に愛執し、他を嫌い憎むという、そういう迷いの心はなく、この上ない覚りの智慧(光)を本質としている、と教えられています。

覚りの智慧(光)が無量なるゆえに、はかりなきいのちの阿弥陀仏は、一切の衆生のいのちを我がいのちと見、一々の生ける者を「我が子」とみそなわす大悲の智慧がおのずとそなわっている、そういういのちでありましょう。

それは理論でも理屈でもない、いのちそのものもっている不思議な尊い働きであります。一切衆生の苦しみに共感し、愛さずにはおられないという無量の慈悲、それを阿弥陀仏と申すのであります。

広大で不可思議な慈悲心です。万人に働いて下さること、しかもそれを知らせるために、南無阿弥陀仏という言葉にまでもなつて喚びかけて下さっている。このようにして私たち一人一人に会いに来られていることは、不可思議であり、本当に有難いことです。

神力本願及満足

(和讃問答)

神力本願及満足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

真無量を帰命せよ

(語意)

神力本願（不可思議な救済力をもった阿弥陀仏の本願）

究竟願（どんな困難にもくじけることなく必ず成就する願）

現代語意識（弥陀の浄土は、阿弥陀如来様の不可思議な本願力によって仕上げられた領域であります。法蔵菩薩の本願は欠けたることなく満たされていきます。弥陀の本願は、真実を明らかに悟りきつての本願であり、決して破綻することのない本願であり、どこまでも一切衆生を助け遂げずはおかないとの願であって、こうしてできあがった浄土です。これは一切衆生をどこどこまでも救いたいという阿弥陀仏の不可思議な大悲のお手立てであります。それを思っ

て、真実はかりなき阿弥陀に帰せよ、と。）

* *

D 「このご和讃は直接的には無量寿経の

これみな無量寿仏の威神力のゆえに、本願力のゆえに、満足願のゆえに、明了願のゆえに、堅固願のゆえに、究竟願のゆえなり。

というご文を元に讃えられた曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈和讃』に依られています」

N 「神力本願とは」

D 「法蔵菩薩（阿弥陀仏）の不可思議な大慈大悲の願と修行によって成就されたお力、いわゆる本願力ですね。浄土はそういう不可思議なお力によって開かれた世界とのことです」

N 「お浄土そういう不思議な力によって開かれたのですね。では〈及〉とは」

D 「及はという字ですが、この場合は成就された本願力を開けば、〈別して〉ということとで、満足願・明了願・堅固願・究竟願という四つの願が

成就された力であると、先学はいわれています」

N 「満足願とは」

D 「法蔵菩薩は一切衆生を救いたもうに十全な願を起こされ、そして欠けることなくそれを成就されたのです。それゆえお浄土は法蔵菩薩の願が欠けるところなく成就している世界であり働きであるとのことでしょう」

N 「弥陀の本願は私たちを救うのに完全円満な願なのでですね」

D 「一切衆生を救いたもう本願力はその働きに欠けたものがないゆえに、その本願力を信受した衆生の根本の願いもそれによって満たされるのであります」

N 「私たちの根本の願いとは」

D 「金がほしい名誉がほしい悦楽がほしいというようなさまざまな自的欲求ではなく、私たちのいのちそのものの根本欲求のことです。それが本願力にであって満たされてくるのでしょうか」

N 「根本欲求が満たされてくるとどうなるのでしょうか」

D 「先ほどの自的欲求が削られていくのです」

N 「ということは私たちのいのちの根本欲求が満たされな

いから金銭欲、愛欲、名誉欲、権力欲などの欲求が跋扈してくるのでね」

D 「ですから、たとえ自的欲求を減らそうと思つて、自分の良心や反省による努力で減らそうと思つてもなかなか減らないのですね。やはりそういう自的欲求が起こつて来る元の根本欲求が満たされないと思ひます」

N 「いわゆる道徳的な反省とか努力ではムリなのですね」

D 「一時的に我慢するとかカツコをつけることはできても、貪欲を離れることは難しいのです」

N 「では根本欲求とは」

D 「それに関してですが、ドイツの文豪ゲーテ（一七四九～一八三二年）が亡くなる時に、〈もつと光を〉といったそうです。ゲーテは人生に光を見出しておられたお方でした。それでですから死にがけに〈もつと光を〉といったのではないでしょうか」

N 「一般に死にがけは暗いのでしょうか」

D 「ええ、そう思うのですが、私の独断かも知れません。ゲーテはすでに心は基本的に明るかった人だと思ひます。ですから一層光を求めたのでしょうか」

N 「光といつても太陽や電灯のような物質の光ではなくて、心の光ですね」

D 「当然そうですね。人生生活において何か困難や不幸にであうと心が暗くなる、あるいは真つ暗になり、苦悶し、どうしていいか分からなくなりすね。その時に少しでも解決される見通しがつくと心がほつとして明るくなるでしょう。そういうことを私たちはしばしば経験したと思ひます。心が暗いと不安ですし、逆に人生に不安だから心が暗くなります。なんといいつても私たちは人生に光がほしいですね」

N 「そうですね」

D 「人生に何が必要か。その大事な一つは私たちの心を照らし人生を根本的に明るくする光（心の光）だと思ひます。ちようど太陽の光に照らされない地球全体が闇であるように」

N 「生きているものは植物でさえ光を求めますし、人間は物質的な太陽などの光だけでなく、自分の人生を底から明るくしてくれる光を求めずにはおれないと思ひます」

D 「実は、私たちの人生を導いて意味あらしめ、私たちの人生に行くべき方向を示し、しかもはかりない光でもつて

お便り

T・S氏より

「木村無相師臨終法話」注記

「木村無相さんの法信」の中で私が特に感銘を受けた法話を自分のために書き写したものであります。と同時に私がようやく「弥陀の願心我が安心」とうなずけた感謝の記録注記でもあります。南無阿弥陀仏

一。土井師が無相さんに「末灯抄」の「はからいなく弥陀にまかせよ」の言葉が自分にとつて一大鉄槌となつたとの返信に、それはどう意味かと無相師は鋭く追及しておられます。それは「はからいがやんだということかまたははからいがやめられぬ自分である」と明らかになつたことか」と。ここから今まで聞くことができます。南無阿弥陀仏

本願を信じればハカライがやみ助けられると私は思っていた。信心を得ればハカライがやみ煩惱も消えると、とんだ勘違いでありました。無相

師の人間観はそのような甘つたるいものではなかつたのであります。正にどす黒い泥中の中より咲く壮絶の信心でありました。「ハカライがやむ心に信心があるのかそれともハカライがやまぬところ」に信心があるのか」という本願の核心に迫る大説法が始まるのです。今まで誰も聞かなかつたような自己の宿業の本質が思い知らされるのです。

二。昭和五十六年八月（老人ホームに入る前年でしょうか）三十四回の法信で次のように述べられています。

「極重悪人唯称仏、ただ念仏、はもう一つウス紙一枚のすつきりしないモノがあつたようでした。」無相さんは①自分で念仏申して助かろうとする②自分の心で本願信じて弥陀をたのむ③ということも落第でした④自分としてハカラワヌとか自分の生死を弥陀にマカセルという⑤ことも不可能であつた。④それでクサイものにフタを仰せ一つと書いていたやうであつた。悪人唯称仏としか体感されぬのに「極重悪人唯称仏」と体感しているかのやうに「念仏詩抄」に歌っていた

がそれはやはり不徹底なものであつた」と思われたのであります。

私思う。みずから心血注いだ「念仏詩抄」をよくぞここまで自己否定され内心を吐露されました。無相師だからこそこの真実の言葉がはけたのです。我々凡夫には自己の心を厳しく見ることができません。我々はすぐ弥陀のお助けを持ち出し救いを予想しもう決まつたかのように浄土を前提としてしまいます。無相師は自己の心にウソをつくことができませんでした。ここが我々と大きく違ふところではあります。我々はすぐに自己の心に妥協しいい加減なところで落ち着こうとします。しかし無相師の自己を見つめる目はそのやうなことを許しません。自分は弥陀を頼むことも、まかせるとも信じることも落第であつたと。このような厳しい自己否定からしか真実の道は開かれぬのです。浄土真宗は決して易行道ではありません。難中の難なのです。

三。昭和五十六年八月。思いもかけぬ「悪人」ならぬ「極重悪人」の大自然（光明による）によって「極重悪人唯称

仏」「称我名字」「ただ念仏して」の「よき人の仰せ」「如来の勅命」が初めてこの極重悪人の自己そのものに実にピッタリといただかれて生まれて初めて「我が生死の帰依処」は如来回向のただ念仏にありとはつきり頂かれて、決定せしめられたのであります。

私思う。この「決定せしめられたのはどうしてか、光明による」とは何を指すのか」そこが知りたい。しかしそれは書かれていません。しかしこの短い文から推測するしかありません。悪人の自覚から極重悪人の自覚への転機は何か。それは念仏して助かろうとして落第、本願を頼むのに落第、ハカラワヌことに落第、何をしても落第に気づかしめられたと。この何をしても落第というところ何をしても助からぬという絶望的自覚に大光明の鍵があるのでしよう。無有出離之縁、自己の力では助からぬ、死ぬまで煩惱はとめられぬと絶望観念したとき、弥陀の本願はこの極重悪人の無相師本人を正客にして懸けられていたとピッタリ実感できたのです。ただ念仏して来たれと。しかしこの理屈（二種信心）は念仏称える者は皆知

つています。では何故大自覚するものとしなないモノとの相違があるのでしょうか。

私は思う。本願を信じることも弥陀を頼むこともハカラワヌことも全て落第と自覚することもそれまできぬ自分でありましたと知ることが本當の機の信心といふのでしよう。人間の頭でわかつたというモノは本當の自覚ではないのです。自己の宿業を自覚することもできぬ深い悲しみが宿業の自覚といふのでないでしようか。その深い悲しみ（自覚）を知らせるのが「我が生死の帰依処」の本願念仏であつたのです。その本當の底なしの宿業の悲しみが弥陀の願心と感応道交したのです。ここに大光明（大自然）に照らされた本願相応の罪惡熾盛の私の機が闇の中より立ち上がったのでないでしようか。これは理屈の世界では推し量れませんが弥陀の本願願心を受けとめることはできぬのでしよう。生きた念仏は自己の深い悲しみと伴に生きてあるのです。助からぬと信ぜしめられたとき弥陀の生きた本願が私のためであつたと領けるのです。不思議な教えとしか言いようがないのです。（続）